

Canopus 社の業績見通し、事業の概要

Q: 2014年度における Canopus 社の利益が94億円の見込みとのことだが、2013年度の足元の業績動向などをベースにしたものと思う。2013年度の業績状況、プラス要因の背景などがあれば教えてほしい。

A: 2013年度の業績状況を精査した上での見込みである。今年はロイズ市場が全体的に好調であり、北米でハリケーンなどの大規模な自然災害損害がなかったこと、強みのある北米財物保険の市場で若干のハード化傾向が見られることなどが主なプラス要因である。また、Canopus 社による Omega 社買収の効果が2013年度以降現れてきており、2012年度までの収益性と比較して2013年度以降の収益性は改善が見られる。

Q: Canopus 社の再保険・元受の割合を教えてください。

A: 概算では再保険は35%、元受は65%。セグメント別では、グローバル・プロパティでは再保険が多く、グローバル・スペシャルティでも一定の再保険がある。英国リテールは全て元受ビジネスである。

Q: 保険引受ポートフォリオの見直しは行なっているか。

A: 保険引受ポートフォリオの見直しは適宜実施しており、Canopus 社のビジネスはより筋肉質なものになってきていると考えている。

Q: Canopus 社の現在の株主との取引関係について教えてください。

A: 現在の株主はプライベート・エクイティ・ファンドであり、2003年のマネジメント・バイアウトによる創業時にスポンサーとなって以来、その後10年間株主として支えてきた。保険取引関係のない純粋な投資家である。

買収の影響

Q: 約1,000億円の投資であり、現状のNKSJグループの資本の状況からすると影響は限定的と思われるが、その他の施策に影響を与えたり、例えば政策株式の削減ペースを見直す、といったことは考えられないか。

A: 政策株式の削減計画については現時点で変更する予定はないが、日経平均も足元では上昇傾向にある中、将来のリスク・アセットのあるべき水準について、検討に着手している。

Q: 買収に伴い増加するリスク量について、分散効果控除前・控除後の金額を教えてください。

A: 分散効果控除前でおおよそ600億円、分散効果控除後で300億円強のリスク量増加となる。

Q: 今後 NKSJ グループの一員になったことにより、Canopus 社のビジネスを拡大できる余地やシナジーがあれば教えてください。

A: 海外保険ビジネスは引き続き伸ばしていきたい。シナジーについては短期間で生まれてくるとは思わないが、例えば、当社は東南アジアの殆どの国で元受免許を持っており、そこに Canopus 社のノウハウを導入する、といったことが考えられる。

その他

Q: のれん処理の方針、償却年限について教えてください。

A: のれんの償却は20年間を想定しており、この仮定に基づけば、各年の償却額は約17億円となる。

Q: Canopus 社の経営陣は留任するのか。

A: 基本的に現経営陣に留任してもらう方針であり、リテンションのための対策も打っている。また、中心人物であるワトソン氏としても、自分が育てた同社の経営にコミットしていきたいという強い意向があり、当社と共に会社発展のために取り組んでいこうというトップ間での合意があった。

Q: 海外への投資は一段落したと考えてよいか。

A: 2010年の統合時に2,000億円の海外投資を計画したが、今回の買収までで約1,600億円実施したことになる。今回の買収により、中期経営計画における利益目標の達成確度は大きく高まったと考えている。今後、損保ジャパンと日本興亜損保の合併が控えている中、海外拠点についても統廃合を進めてきている。さらに、7月に海外経営管理部を立ち上げ、既存拠点の経営管理強化に向けて取り組んでおり、当面は既存事業からの利益を出すことに注力したいと考えている。2016年度以降の次期経営計画におけるM&A等については、今後の検討課題である。

以上